





218 肆  
門 459  
巻 63



重修真書太閤記七編卷之七

羽柴勢天王山を取占る事

并明智松田以下知の事

去程小羽柴筑前守秀吉の十一日の夜半むのり  
尼崎と進發ありしに諸將のつとも後ま下の  
と討立る秀吉とて又鳴下郡山ふのり馬と  
小高塚小打上あむ休足ありしに荒木藤  
兵衛氏藝とめさ其方此邊の案内者あり定め  
てあらの車の知たるならん此塚の名を何と  
いふと尋ねあへ氏藝つとんぞ答へ申ける



太閤記七編卷之七



様いりあも此塚の名ある処にゆかりあり馬  
塚と申てゆひし去る頃中川頼兵衛和田伊賀守  
とあつて討てゆひしあり今勝塚と申ゆと答  
へし筑前守何といふぞむし馬塚今勝塚  
いさこの門出よこいさといふと喜びむ馬の上  
りう鞭さしむひとあはなる塚の何といふぞ聞  
るしとありけるふ氏藝延上りあれと見つとあれ  
なる塚の糠塚と申てゆあめ塚の通りが即山崎  
てゆと申げきい筑前守我居るゆい馬塚とて敵  
陣の糠塚糠の馬飼りゆめめめめ然るふ我へ馬  
にありて敵の糠はあはる此軍味方一定の勝利  
あり

と大聲ふるはなりあり心地もや諸軍勢氣はこ  
ろの大將軍は皆人となり馬はなり敵のぬきと  
ららるゆいさまりとあはさたてあつたり  
是も万歳を祝しつとあたりとあつたり  
梶原神牧さくら井廣瀬關戸院をらせ過て山崎の  
南のゆい著たりけり  
荒木藤兵衛氏藝の丹波の荒木山城守行重の從  
弟違といひするゆい從弟ありとも  
筑前守の曲あれは著陣あるとそのまゝひとくふ  
四方と巡見しさて馳廻り堀尾茂助吉晴とゆして  
宣ひけるい明智が勢の勝龍寺までたるとあ



ぶえたり然バ敵あひこるるる近一戰場ハ山崎  
とやく其方人数と天王山へお上り上りこり敵  
と目の下のみく鉄炮とるあちめけなむ味方の戦  
大ふ利と得てしつをけくと下知あへば吉晴の  
しこまりゆと申もては七百餘人の鉄炮足輕と  
引さげ天王山へと押出に

一説は筑前守堀久太郎秀政とめして汝は  
と申付てしつをけく鉄炮足輕と引率して天王山  
へお上り上り加勢の堀尾茂助とさ遣るは  
庵とありしといふ秀政今年三十歳なり  
吉晴今年ハ三十九歳童名仁王といひし時十六歳

はく高名したるをいめとし十七歳の夏元服し  
て茂助と改め秀吉に從ひ吉晴と名乗りあま度  
手柄とあつるし長濱にて百五十石の知行とけ  
今ハ播州にて大祿と賜り物頭となりしは吉  
晴もさるののち筑前守の一言とさくとそのま  
ま馬引をもひらりと打のり左右よむぬげハ松田  
左近右衛門吉川新兵衛並川平右衛門小野彌市郎  
中西勝吉保木吉右衛門廣瀬專之助一之瀬仁左衛  
門とさしめ三十八九人を從ひけり筑前守是とみ  
て天晴武者やいささふしめけもせよあくる  
ちと聲めけむへはなむういをさもためらふべ



砂煙とたゞぞろぞろゆく荒木藤兵衛是をみ  
 ておくまゝののちをせむう筑前守あつろふげ  
 ふうち見やう諸軍勢とさしやぬさ軍いふ勝た  
 るを馬のこるひとほろくきて境の緒としち勝  
 ら諸軍のかぞゝ負するは秀吉うあやまらゝ一人の  
 手柄とたりみちの隊とるあるは鎗と弓たぐひう  
 たとけて透間あつそを鉄炮の畑の絶間と分別せ  
 ると乗廻して下知せしむけるが弟三番と備たる  
 堀久太郎秀政とびらを天王山へ堀尾茂助とさ  
 しむげ上よめうて鉄炮を打ちへと申付たりた  
 だし彼山ふ二道あり明智も定めて此山のことば

心得つらんは茂助一人してさぞさびしくいへ  
 人数とへ三番とのこし置弓鉄炮ののむうう引  
 こげのの京あり上ふ道筋へ横筋違よあゝあゝ  
 めうは明智が手のの一人よてもこの山上へ登  
 う得たいをさあへとさしやぬさ軍いふ勝た  
 らんとさし心得我預の弓鉄を引日け面もあうは  
 そせのゆるさうとさるゝとさるゝと夏夜をゆくあけ  
 行て寅卯の刻も近げの光秀勝龍寺とくう出  
 天王山とさらとみく山手の先陣松田太郎左衛門  
 とよひ近づけ其方へ此地の案内者たるうへ武功  
 る世よとさるゝののちれは打まうせく頼むぞよ



今日の軍場ハ山崎なりあま見ゆる天王山ハ大  
事の切処なりゆきゆき弓鉄の足輕とあ  
上山崎の軍半あらんとて手ぎげく射うけ打うけ  
あハ敵を破らんとい手のうちよいそぶあへと下  
知しげき松田うこあり内々丸様又存知けひ  
し御下知もあはにいうとと見合をてゆひ  
何様究竟の謀といととそその手の侍並河  
掃部とてめ舟波七手のめのとととと弓鉄  
三百餘挺又兵士七百餘騎と引率し天王山ととを  
をめける

明智日向守と羽柴筑前守山崎の天王山と争ふ

この嵩よめりて弓鉄とてあちうげんとてめ  
るよあり六月十三日小暑下元み入たれハ通  
甲のひ位天王山みあり時將ハ中宮甲子の天禽  
と直符とて死門と直使とて光秀も白井浄三入  
道と就て三式と學びしといハ必定この符使  
と心よめけあはる太一式よありて推  
ら乾六よ乙奇ありて丙奇と會し下奇山崎みむ  
めり又六壬式よて考ふとバ六月十三日巳亥  
ちり因て勝先火將又徵明水將と加えて初傳と  
一徵明水將又天岡土將と臨まめて中傳と  
天岡土將又從魁金將と臨まめて末傳とバ履



これと方角ふ配當これ攝州方ハ勝先火將  
ふして午の正位なり京方ハ徵明水將  
に當る六月火氣最盛大なり水氣ハ幼弱あり  
るれ京方ハ敗走の氣ありて摂州方ハ必勝の氣  
あるゆえんと知べし明智軍記ハ松田太郎左衛  
門十二日の夜半ハ命を受けて天王山ハ上ることを  
謀るとしるは十二日の夜半と中宮甲子とあり  
故なるべし筑前守方ハ十二日酉戌の刻  
と中宮甲子と取りあはせハ光秀のちのりつる處  
あり二時もてゆるりなりこれ足利傳の遁甲  
と四國傳の遁甲と時正のちりり方相違ある故

と知べし

甘利八郎大夫大言の事

并山崎先鋒三組取合の事

羽柴筑前守方ハ天王山へ堀尾茂助吉晴荒木  
藤兵衛堀久太郎ガ弓鉄の者をつくり上山崎と眼下  
に見たり時刻をまらさし息をつめし追手の先陣  
高山右近大夫二千餘騎ハ真先ハ進きたり塩川  
伯耆守安部仁右衛門これあくれとををりつるさ  
山崎の町ハ入南方の門をさしめ味方と云と  
もたやとく往來をゆるさばひとく必死の覺悟



と見へたりけり

一書小明智方先陣淺黄地小撫子の紋の旗金の  
 助相備へ山本但馬入道進士六郎兵衛伊勢安房  
 守柴田源九衛門川田淡路守以下五千餘人右備  
 淺黄地小桔梗紋の旗三蓋笠小猩々緋の二段馬  
 連の馬印の明智十郎左衛門相備へ上野筑後守  
 伊藤志摩守鳥山主水助叔原伯耆守以下二千餘  
 人左備赤地小逆鱗の紋の旗銀の角取紙の馬印  
 膳後藤喜三郎久徳六左衛門以下二千餘人なり

二陣へ丸小上字の旗金の棒小銀の角取紙付て  
 村上和泉守相備へ安福右衛門奥田宮内藤田傳  
 五郎以下三千餘人三陣へ巴の紋の旗小破芭蕉  
 の馬印ありたり池田織部正村越三十郎中澤  
 造酒助以下三千餘人まで押たりけり小川土佐  
 守丹波但馬の野ぶり五千餘人と引率へ五備へ  
 己ヶ圓明寺へ陣を取へ光秀へ旗本の勢六千餘  
 人と率へ長岡の天神と後へあて調子村と前へ  
 して陣とたり溝尾庄兵衛明智孫十郎内藤三郎  
 次郎四方田又兵衛山本三右衛門古田權之助等  
 とりしめその数稠く列と立その外並河掃部今



峯頼母久我三左衛門木村清左衛門山手小を  
 りて隊伍と立ちて海田太郎八渥美隠岐守三宅  
 孫十郎堀口三之丞以下三千餘人の川手又むけ  
 て備と敷りと有  
 池田勝入入道筑前守の噂より先陣と高山  
 にゆづるといへども隙のあるは後  
 めけし打死せむとさうめひいりとも高山を  
 やく此心と知たれば山崎の南門をうごせしなり  
 爰に於て池田勝入せんうごせしなり間道の  
 あると案内者と束め出して尋ねる川邊に付たる  
 細道ありこれ山崎の東の惣構の外よりて馬に

あふをばるる一人だちよて越つて右近大  
 夫の打物のさゆをとり今や時刻と待りくまば  
 塩川伯耆守同吉大夫安部仁右衛門をあし馬と  
 引ををやといふと出んと扣えり高山が侍  
 又甘利八郎大夫といふの我儘氣墮しして無骨  
 の生を付ふれば日頃末座よの伺候しして罷賞  
 ありあづらうさうける高山が前みひさまの  
 申ける爰に兩儀の決しごとこのゆより恐  
 ある申条ふりへとも御明判を願ひ奉りいと申せ  
 しの右近何事と問八郎大夫申ていらく某御  
 家の子の列にめし置といへとも新参のゆより



未座に膝をくゞし事しく役立すと殿の  
おぼしめし故ぞくゞりたる此戰場に召具せ  
らして以後に逃たゞ殿の役立すと御覽せ  
し御眼の光にあはれつゞけと父祖の功  
で失ひて不孝たるべしと進で敵と打合  
たれい殿の役立すと御覽せられし御眼の  
とゞぬ處をあらはし不忠と申せしつゞけ  
付て然るべしと決しめしと申せしつゞけ  
高山心中より悪き奴のめめいひ様や切て  
捨んとあめいしと大事のまゝの小事ありと  
黙然とくゞしめめいしと八郎大夫ありと

み仕るべしとやらんと三度まで申せしと右近更  
何ともいふべしと處に敵近つたぬとあはれ  
鉄炮の音をきり聞えしと八郎大夫立上り  
て御免と蒙り不忠のめめいとあり成いとも累代  
の武勇を失ひ不孝のめめいとありりたるまゝ  
とよりくゞしとて群る明智勢と突散しあは  
も人なる處をゆく如く見るつゞけ七八人を  
突あを高山右近大夫が家の子み甘利八郎大夫今  
日のいくこの一番首と名乗せしつゞけ突てまは  
しと手も負ひ明智の先陣の齋藤内藏助利三との  
子伊豆守利光明智十郎左衛門光近奥田宮内景弘



同市助景貞あめささげんで切廻る高山が二千  
餘人と齋藤が四千餘人と追つまくうの入りみされ  
あでしこの旗と鳩のちこと入めをりくたさうひ  
けさうち又甘利が名乗聲高々と聞えしうの齋藤  
が物頭又倉橋茂大夫と名乗て甘利を目よめけ足  
輕とたくみく切めくる處を八郎大夫をうさげの  
さまいろうといふありをゆひらめりは鎗のや  
ささのこをむやくて茂大夫が太刀をぬんとこる  
処とぐざと突つうれ暫ためらひしう痛手ふれ  
ら馬ふりとうとあつと見るとあり走り寄首  
らち落ちて立上る処へ茂大夫が弟倉橋次郎兵衛

兄の敵のうさと突め、るをめいしく石突を  
めて眉間を一突つげむ目くるめさ倒るゝ処をた  
たさ付て突伏これをも首をうち落し二川の首を  
腰よつげ高山が前よりこまり殿の御眼違ひを  
仕うて不忠めのみらうてゆへども父祖父の手  
柄の真似をむくいしてゆへまの孝子のめ  
たろくと存ゆと傍若無人又申けるを右近のめ  
と打つしひその孝子あひ右近がめしつる手柄  
手柄と褒の、する是を軍のそめあて双方の勝  
負のまぶのつむしとも見えしう阿閉兄弟池田伊  
豫守後藤喜三郎久徳六左衛門小川土佐守の面も



方二陣の大将中川瀬兵衛清秀入のりて潮の  
くが如く突てあゝ中川がそあへたゝの鉄炮足  
輕一隊と先またて時分いゝさどといふ程らとあ  
と筒先をろへく打出は烟のいまま絶ぬまゝ先手  
の侍鎗ととり我あとい番あれととてめはどのつと  
枚先の名またとへく武者ぶうい余所の見まめ  
もいさやの清秀自身鎗をとり二の身の備とふ  
みしづめ阿修羅王のあれく如く突めくるこの  
間二陣の足輕が打るは鉄炮の烟はつれ  
て三陣の侍鎗とうちあがり入めくるらけし軍

のめひひさい實も源氏重代津國の多田一流も傳  
えくるとさまめく見へたりけし清秀いつと  
真先またちて戦へばその手の侍たれうた一人も  
あくまへさ明智方の右備伊勢與三郎真興諏訪飛  
驒守盛直御牧三左衛門兼顯弟勘兵衛兼堅藤田傳  
五郎行政同藤三行正渥義隱岐守櫻井新五左衛門  
逸見奎允香川刑部等二千五百餘人中川と討取ん  
とさあひめく鉄炮をうちけ續いて鎗とさの  
弓衆とさあめく射出し高山中川の兵  
士と伊勢諏訪の隊々と右にあはるは右とられ前  
にあるめとそればうらみあうそれとさまめく



あこあふたれば南北みざればあふたつめふむと  
血あふれず杵とたゞもそ屍いつんぞ累々たりとい  
ひむうもめくやらんめくる処へ三陣の池田勝入齋の  
一騎ちの小路ありひそく進んで明智方の川手あそ  
るへ一龍備めとの織田七兵衛尉信澄の家老たり津田  
與三郎志水加兵衛渡邊源右衛門合へ明智の侍大将と  
して二千餘人と真丸よりと相えたるその中へあめく  
もあめく切くりと爰と墓所とありあめくもばりく突  
たつま津田が相備の山本對馬入道仙入村上和泉守伊勢  
安房守吉田權之助松本主膳進士作九衛門上野筑後守秋原  
讚岐守伊藤志摩守以下二千七百餘人ちともたあらる池

田よ向ひ打うれは池田勢と二つは引か左右の敵もさうり今日と  
めさうと切あふあふと帝釋修羅の戦も是ふいつてまらへと  
太刀の鏝音天地よひと鋒よりつる電光石火まきひまもあ  
らぶあを入るれ入るり中川池田高山が勢一足もひくあひとた  
ふひよとあめくちめて踏さるるは明智方もあふらとさうも  
劣るる千騎う二騎よなるやそも退か退くと切むとぶつれも  
手柄の人々あれば逃ていのちを何せん死すの後の名あを  
しげとと打あひ射あひ突あふさまへ龍希風雲鳥蛇の浮沈  
いつても得る術あればいつてアとも見さうけり  
丹波國栗田郡保津の莊よ和泉守口といふ字ありとふ村上  
和泉守の城の大手あり一跡といふ又城構の堤も処々ふのこ

八月廿二日通来丁

二



とて又和泉道といふ細道ありこの頃和泉守あよそ二万石をう  
りと領しといひ今に至ると保津村上氏の裔孫のこれより  
書ふ池田勝入齋地白く鎧蝶の紋と云ふ旗をたてて父  
子三千餘人廣瀬と石濱の間陣を取といひ六月十三日辰上刻  
より軍をたてり高山右近陣より甘利八郎大夫と名乗てより  
此一番鎗と合を敵三人打取氣色をたると齋藤内藏助父子  
みづゝ大長刀と取て切めり高山が勢齋藤ふ切られ六七町退  
たりげると見て中川瀬兵衛と云ふもあつて突く齋藤  
父子高山と打とて中川より向ふて戦ふ池田勝入得たりと齋  
藤父子が後陣と切んと進こけりといひ見る

重修真書太閤記七編卷之七終

重修真書太閤記七編卷之八

堀尾堀松田と一戦の事

并兩大將軍使と遣る事

明智方の津田與三郎ハ織田家の一族にて七兵衛  
尉信澄の執權たりし信澄横死のち明智方へ  
をを加ふる志を變て忠誠を盡しけるハ逆中の  
頃といひつて山崎にてハ川平とあつて池田勝  
入齋に向て戦といひけるハ與三郎馬の上あつ  
川立上り采配をうちあつて下知しけるハ七兵衛  
尉殿よめあつてあつてその軍あつて勝ても



負ても大将の御眼の前のことにして我等が心々の  
ふふ及むる面々とも氣に安らうらん今尉殿ハ見  
と聞ゆ一むをぬと明智殿の心のうちよあまの  
ののをめしけりしれし七兵衛殿の淺々しきこと  
いとせんこのくゆしけしむいづともあまを討  
死せよ一足ありとも引てい人よあめてをむく  
づさやとくゆくと大音あげくいさめしむとさ  
しめれたけき池田勢も半町むらうあしきとされ  
たり池田勝入齋これを見ていひくいなさめめめ  
もの軍あうりふ紀伊守いあま追りしむと  
あせうけりしむり片桐半右衛門伊水清兵衛うけ

あまらぬといふありしむと鎗と取從横無尋に  
さめしむる秋田嘉兵衛梶浦兵七武村小平太片桐  
與三郎等紀伊守あつづし津田が陣へ切入り  
こまあしはありしむと切あま士卒の銳氣を引た  
てあめささげんで戦ふると津田が二千七百餘  
騎と池田が三千餘騎入りしむり入みどし追のま  
うつめらよめしむと攻たしむるその外高山右近大  
夫が手に齋藤内藏助父子とをり合火水なるりて  
切つしむるし齋藤が四千餘騎高山が二千餘騎あ  
しこの旗と鳩といふ字の旗あまらしむるれり  
しむるしむるあませ巴の字あまらしむるしむる

大月二二編



あつり歎味方のあいろさうみ見えさうれぞ中  
川瀬兵衛ハ山手の勢又さう合息をもつうをバ  
切あふあど血いぢうまゝ混々と杵をもあはに  
たごもそをのべ尸いつんぐ岡のどく互み命と  
めさうとたいりみあど誰入めさるべさ義勢も  
ち然る齋藤父子の軍手あげくしと高山あを  
まむ切あつりあど塩川安倍の人々も鎗疵  
太刀疵二ヶ所三ヶ所あそぬものもなく甘利八郎  
大夫あどあつたあつとも齋藤父子のさし進ん  
でもゆるあど高山つひは突すけく三四町を  
あ追たせらる齋藤父子勝よのり短兵急よめと合

しあど中川池田是と援らんとすれハ明智右  
左の備さびあつたあつ攻討よあ中川池田  
もあつりあつあつあつあつあつあつあつあつ  
とあんと見えあつあつあつあつあつあつあつ  
り天王山ようちあつあつあつあつあつあつあつ  
太郎今日の軍の首尾と考へあつあつあつあつあつ  
端しあつあつあつあつあつあつあつあつあつ  
らで耳しあつあつあつあつあつあつあつあつあつ  
ふあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ  
衛門並河掃部人数ハ凡七百をうりあつあつあつ  
にめけく北のさあつあつあつあつあつあつあつあつ



あをありまたれ茂助久太郎これを見くさる敵  
なり御さんなれと岩石伏木さうひちやく真一文字  
にゆけさて筒先とそろへくはるべそあに放ち  
ゆけしうい今責のゆる松田並河さもゆけ敵ハ山  
上又あるぞみごうみ攻上りてあやまちとをよと下  
知しはく太郎龍衛門ちとおをうりしぞちゆ筑前  
守み取ましとおむゆるなりされどもおれを取め  
へさぞあくべきやあましう外又道ハなまさと左  
右とみゆへり思案とる処と山上より見をまし  
ゆけ打又打ゆけしうを矢よをに六七十人ちりく  
と打たとされ疵とめみむるめのためをしらば並

河う勢ハちとおくきて上りけるが松田う勢の手  
負て伏さるみ恐怖ししゆみせましとあされん  
て立たる処へ茂助久太郎が五百餘騎さつと左右  
へ引こりて矢玉をくくまに雨あられとちうけ  
射ゆけなりしうが並河の手のめのをこえは茂  
助久太郎これを見て敵の先陣とゆうちとをて真  
中備と射るやめのとちもゆめのとちもと立あが  
り立あがり下知しければ二組の足輕とも勢と得  
てゆさしうしう打とせけるやとよ松田が七百餘  
騎ちりくくと打たをさしりれば後陣の兵士入め  
ちりんとするみ味方の屍よさるえりて進え



松田並河いらつゝ足輕どもとあさうよせりた  
て鉄炮とらゝせりめども山上に向てうは筒あれ  
どあるひの越て行衛とらゝびまゝの木の根とら  
ちこんで敵とあゝらびめとていあの山を取ら  
とあのひもあゝらびとてめとらゝら山上とあら  
んであゝらゝイめり

一書と天王山へむらひたる松田太郎左衛門並河  
掃部兩人関とつゝらて攻上らんとらゝ折ら  
羽柴がゝ山上へそあゝらゝ堀尾茂助堀久太郎  
鉄炮二百挺筒先をそらゝら打出は烟の下より  
うつて出切立くえいゝ聲と出しそ攻たくりみ

松田並河大音と此山敵とらゝれゝ一大事  
うとらゝめくと下知とあゝ味方右往左往と散亂  
あゝ松田並河是まゝとらゝらと大長刀と打あゝら  
山上目うけり割て入敵二三人切てあとと松田  
勇戦となゝらゝ山上より鉄炮とあめあゝらと  
打出はまゝら終と松田いゝこれたり並河掃部  
と敵十二三人うち取これをしゝら引退くと見  
えたり

めらゝる處と明智の本陣より斥侯の武者をせう  
り一の御先鋒齋藤内藏助父子大と戦ひうらと筑  
前守の先鋒高山右近と切らゝらゝ高山

大月二編八

五



散々ふるちまひ三四町あとい引退げの二陣の中  
 川瀬兵衛の山手の備は切すけこれも大く敗  
 軍あるべし三陣の池田勝入齋の川手の勢は戦  
 け引のろし見えていさをれ山崎胴筋の軍は味  
 方勝利必定と見えくひた天王山はむうひた  
 ふ松田並河の筑前守の勢と只今合戦より最中  
 ていと申せしう日向守大はるさびさもある  
 づさもあるべし齋藤父子の武勇は天下に比  
 らさぬのを高山中川あんとあ及ぶささういそ  
 の中みの松田もささぬのなる天王山を切とうて  
 羽柴勢を追落さんと遠ううとやこの旗本を押

い齋藤父子ふ力を合をよあとうくさるうち  
 筒井勢も手と合をべし阿閉兄弟久徳小川等  
 うむうめめめめめめめめめめめめめめめめ  
 面も心をよめめめ一國の主となる身なるあや  
 ちあるあさううとととととととととととととと  
 徳小川もいよととととととととととととととと  
 あとととととととととととととととととととと  
 もりもとととととととととととととととととと  
 玉山羽柴の兵士あうて松田と戦ふととととと  
 の大将稻須万次郎ととととととととととととと  
 てまのれととととととととととととととととと



とらへて白き母衣と笹の葉のさしものさし  
黒きさしものさし鞍置一むち打くもをいざ山手  
とさしてさし行そのち光秀溝尾庄兵衛をよ  
びよを天王山へ松田を遣を時刻をさしおそ  
ゆきそ羽柴筑前守う人数をやくこの山またむ  
ろして松田と只今軍をさし注進あうこの山を  
敵よとさし味方の軍よあうさしその方い  
そぎ山手へむうひ松田並河さちううをさし  
みともして天王山を取ささしこの山と此方へ  
打とらあば筑前が首と得んて手のうちよあるべ  
し日頃の武勇へこの時よあそいめ高く聞ふ

べいさささち立て手柄をさしとめらさ  
た共ひうぬささの溝尾庄兵衛何とさちとも  
猶豫をささ手の者三百むううを引具してさし  
らう又駈たりけり羽柴筑前守いのも傍よ引に  
けり手足よひとささ廿餘人の若者等と駿馬よま  
たがり諸手をのり廻し備々の緩急を見めぐりま  
ふを常とあしけさ今曉より高山中川池田が陣  
陣とさしめ天王山よてもさし廻りあひ丹羽五  
郎左衛門の備へ入んとさしあふころ高山が旗の手  
のあびさ様心元なりと見て来ると下知さし  
お加藤席之助清正うけあさうぬとひひをささ



しり出山崎表よを付べとや南門もあしひらさ  
軍い今を盛也まの山手まてい中川瀬兵衛明智方  
の伊勢與三郎とうけ合を切つさるれつ戦ふさう  
川手よて池田勝入齋の津田志水渡邊とさう合  
互又面を知らる中あれば死てその名をほさふと  
と生て浮名と流さふとあをのうへつ戦ふさま  
いづきも隙のありとい見えびとせよ高山の備を  
めけぬけ敵味方のあふひうふと見る処は伊勢  
與三郎が手あり近藤半助と名乗武者一騎らうを  
出たり鎧の肩しう境の前ださる鹿角足輕ともを  
引廻し鉄炮うをを氣色むさる有さまを清正心

あくしと見てけとべつとうけまうて見事に見え  
たまふののうを近藤どのとゆらんといふまう  
そめく二尺九寸の刀を以て大げさげようちん  
なる半助をさるもたさる馬より真下さまら落  
しうべ清正さうさる首うち落し首袋入んとを  
ふ処へ半助う家人とも五六人のうさどと切う  
るをささうゆといふまうに右まらうひたみか  
へし四人を切あを半助が首とらめみ腰み付をれ  
らう池田が陣を見廻うてさめくと本陣へ引返せ  
しを見る人も人間ささとい見えさうけり  
一書し明智が使番鳥井半助とありうの半助ま

大目己二編卷八



川清正おむらふありて清正使番の軍をへき処  
みあらしむとゆひしを半助さうば使番と使番の  
戦あらしむとゆひしと云ふとて止を得て一戦  
仕り仕合ふ切うちてゆと申とてあり

加藤清正へ自筆の感状の事

并齋藤丹羽勇勝の事

羽柴筑前守の丹羽五郎左衛門尉が陣所ありて  
存候より出加藤掃部助が注進を待ける処へ清正  
さうり帰り大手の先鋒高山が陣の戦ひをふそ  
急ふゆへとも二の身あてめりゆへ申す中川

か手の軍へこみ花々見えてゆあれも味方十  
分の勝利とあがえゆ勝入齋のいくさあり今ふそ  
じめぬとあらし追手へ人数をむりやとに  
氣味よくあがえゆ就中中川が手よて明智方の近  
藤半助と申めあまうに傍若無人よとらさゆ  
故打らるし首取てゆつばその家人とも追うけゆ  
故あふとく四五人切ふと申とて申すうの筑前  
守より取たり今日使番なり使番のゆくさを  
ぬめのそとのをれけるより其事も心得てゆへ  
ども半助路次をさすゆい故是非なく如斯仕り  
ゆと申ふ付て筑前守硯引るを筆を取て



武勇心掛のめの手柄のめ若めのとの其方  
たむべしといふ武功をほくとべし

六月十三日

秀吉

加藤希之助どの

あくの如くさるるは腰物そと賜らり猶  
てらうまのり情出しくをさゆ追て大身小とり  
立ざしといひさされける間よめあいう小丹羽  
どの時刻らうく見えてはゆ御人数をお  
出しあひ高山が手へ御とら誥然るべしと申され  
けしは五郎左衛門尉うけあさうゆといふ詞と共  
に境の緒とち馬ふ打乗あへばこの手のを共

これあくとと馬たうけり

一書小丹羽五郎左衛門尉の先よと馬印  
あく敵五六人とあさうゆを落る味方と集めけ  
り軍とさうてのち馬印を見ら十二枚はけ  
ふ短冊十枚の損し失ひ二枚のとりとて短冊  
二枚うち違へ家の紋のなうたりけりとて  
それらう筑前守の神戸殿の御陣へ使者をた  
申ける様御先手高山右近明智方の齋藤内藏助と  
戦ひ只今急し見えてはゆ御勢と述々とて  
あふべしといふとありけるまう三七殿一万三千餘  
騎面もあさうと山崎の南門ちうくをあふまう明



智方よてい阿閉兄弟齋藤ふ力をあてを無二無三  
にめけしそけいし高山が勢ども切とくめられ長  
房も今い是すやなりこくはく討死とぐーとおの  
ひ切一足もひうぐと戦ふさう明智方あてもこれ  
あそ大將なれと見てしうべ我打とらんとせめ付  
たる處へ金の竹ふ十二枚の短冊付たる馬あさし  
あー立大音聲ふ丹羽五郎左衛門尉長秀なうと名  
乗やあそさ鉄炮三百挺筒先とそろへくうこせし  
わどよ齋藤が勢どもとこくさく見えける処  
と得たりと長秀鎗あつとり自身真先よ進とて突  
めぐるるとして高山も大よ力と得るさめりゆ

て戦ひけり明智が手らう奥田宮内後藤喜三郎礮  
野彈正これあそ名と得し古兵の丹羽五郎左衛門  
よとや打とれと鉄炮の足輕をいさめたく雨の如  
くよ打とらうとも五郎左衛門尉獅子の如く荒ま  
はうけりふあそれうあめふらどよの進と得る丹  
羽う手らう村上次郎左衛門溝口金右衛門堤左京  
村上周防守尾藤彦兵衛吉田小源太青山伊賀守富  
田武藏守望月六郎兵衛等今日と限りの命なりを  
あーちうともさたかびとく末代までその恥辱とあ  
らんとそふと聲々よあめささけんで切むをぶ太刀  
の鏗音こごすれひぐさ馳ちうふたる響の音凜々

太閤日記二編卷八

上



とこのめとささきと戰場の修羅のちきりこと見えよ  
けり明智方奥田宮内同市助後藤喜三郎礮野彈正  
阿閉兄弟多賀新左衛門鳥山主殿久徳六左衛門小河  
土佐守池田伊豫守いづも聞ふる勇士なりうあけ  
て幾許の榮耀りある死し矢の名を揚ふとよ  
ばくうもばくう駈めくり切ふとをばふと切と  
とこれ算とをこを屍の屠所の羊も似たり  
流る血のころひの糸とを折うげし箭の枯野  
のそとまふまがひつゝ西ふ東ふめけちがひの川  
らつべーとも見えつゝ五郎左衛門尉の高山と  
援らんと八方み眼とくむつて突まはればあれり

鎧ささきとむらむの一人とて突あせられぬ  
わらうりけり明智方よても五郎左衛門一人は突立  
らむ多くの侍とをこを無念わうとあゆんど  
も長秀の鎧ささきとよもをささきと前うと見よば  
後へまはり右うとあゆむべいの川うたよひうめく  
あぞ明智方見定めめめめありけん同士打とを  
したうけよされども長秀今年四十八歳脅力よ  
に真さうりうてうは手一川負もせよ四角八面  
み突てまはさば丹羽う家の子前藤彌市と名乗二  
間あまうの長柄のゆうまうくと打あうり明智方  
にて我あそとあゆみのあうち出て太刀の鉄



と心みまるとばらばら齋藤が侍ふ井上太郎助さ  
もあへどいざまいらふと聲けけ切てめくるを  
彌市得さりと突あひしう太郎助も聞ふる打め  
の達者ちうとぬのけつけ入切入とて入あふ  
せしと見し時彌市弓手の腕とのぐし太郎助とひ  
りり取てあさく既首とめんととせし処へ  
礮野彈正さあちける半弓の箭ふ彌市左の眉後と  
射させ眼らうんぐ立たると礮野をさばらうり  
寄彌市り首と取て丹羽五郎左衛門尉が一の郎等  
前藤彌市と礮野彈正さち取たりとふばらと齋  
藤方ふいあ仕さりと感ざるを丹羽方あはく

ちあしあめく更み音もせ  
一書ふ前藤彌市長時井上太郎助を引もて首  
とめんと内めとと二の突けるさう太  
郎助首の脇み手と負てとてよのどくびを突  
んとせし処へ流矢ささうて眉間み立みうた  
ちらぐ処と礮野彈正され射あたらとを  
らうて首をとるとあり太郎助も終ふこの手み  
て死しとけりとらあり  
又一書ふ明智方辰のらめらう己午の間まで  
あさうに切う山といふとも光秀とらう天王山  
といふうと溝尾庄兵衛をむらうとめ是非



の山と取り羽柴方の兵士と追あつてゆへと  
あせりし下知をとりゆりさす山崎の一  
戦十分明智方の勝利あり終るこの天王山  
より破れつて光秀身と亡ぶるふいさるふ  
しとあうける山あつてひと後の世までもめ  
る傳へしなり

重修真書太閤記七編卷之八終

重修真書太閤記七編卷之九

山崎四ヶ處大合戦の事

并松田太郎左衛門討死の事

去程は羽柴方弟三番の池田勝三郎信輝入道勝入  
齋ハ明智方左備の津田與三郎が組あひ村上山本  
進士志水渡邊等と相いどみけり津田はうのこま  
り然るべし大將は出合て討死せむやとおのひ  
處なる村上山本進士志水渡邊等も津田と心を一  
つなかり今日をめさるの軍なり見くるしと振舞  
して生たりとも誰うはこれを賞翫とるべし然る

太閤記七編卷之九



あむちやうく切合て尸の上み花さうせ後代のうさり  
ふさびせられんをあそたのむなれと言ほと心よゆ  
ふしつと進むと知て一足も引かひりごといさ  
め合射とともうととをこを港えし堤の切  
か如く風は潮のよをくもめくやと見てし勢  
池田もさけり手と推さ力と盡めて戦ひける池  
田う郎等又伊木清兵衛片桐半右衛門その外秋田  
武村梶尾等差物と地へ衝たてて鎗ぶをまを作り突り  
けくさるる津田もさけりみあふとくあくくや  
あひひけんまへ引退くとも退をまどさ氣色よそ  
両陣とを伺りひりつこあふそを備へけり扱ま

た天王山の軍も大うこ四ヶ處一呀とくまうそ  
遅速なく打合さう合をけく戦ひける二陣  
進こし中川頼兵衛清秀はらつう二千五百の勢  
と以て明智方の右備伊勢與三郎う四千七百餘騎  
真中へ恐とげもなく掛入て右よあさう左よさう  
ひ堅横十文字ふ切破りひとまぜもを攻付たり  
清秀元は荒木摂津守村重が組下みて縁者あうけ  
るう和田伊賀守を討てのち武勇のたまれ世に聞  
えしとあり信長公もさるのありとおろし  
ちやう村重謀叛してその家をとろりけりといへ  
ども結句清秀は今まて村重ふ従ひ侍どもを引



率して織田殿の御手ふ付て走廻り羽柴筑前守と  
 の無二ふゆさらひり初ども此度も二陣あり寄と  
 うーちうされども清秀小身なれば然るべし即等  
 も多ゆべそとていさのみ今日集り勢あるを  
 以て頼兵衛大音あげいう淵之助七右衛門二人  
 の居合むる此手の軍ふめくむらう暇をついやを  
 この口惜さ若まゝ高山池田は勝をとらむを清  
 秀いさて何うせん弓矢八幡この敵を追くべし  
 かの山崎を墓所とせん清秀爰ふあり見をて  
 逃たしむたれうの武士といふべしをさむて人  
 を切といゆとるのよ搔つうんで人とばめり

あぐるののよと阿修羅王のあはれたるごとくこれ  
 あらそれうとてめくは一体を身千變万化死の  
 のくるひといふかのよらるひまをるを見て中川  
 淵之助同七右衛門こゝまありと名乗めけく瀬兵  
 衛ふあくまむとてさけむべ死骸いつんで山の  
 如く血しるいあられて川とある太刀の鏑とと耳  
 をおどろろし鋒より出る火のひうりの百千の電  
 に似ておびたしめりいれども伊勢與三郎を  
 らどめ諏訪藤田御牧詫美櫻井香川逸見あどいつ  
 とも日頃の思ふ感と義を専らうて鎗の穂先をそ  
 ろへ腕も拳も徹むくと突合あつろい猛けきと終



中川小突まけ浮足と見ゆるやいかや瀬兵衛清  
 秀真先よそそそと勝たるを續けくとせり付  
 誰一人おくるまへとありとぬど伊勢り  
 手のの皆崩れよとさるれば中川瀬兵衛一番  
 乗と関をほくろく押付けるとあり此手の軍ハ勝  
 いら見をていさやめいととも知は天王山よそ  
 羽柴方明智方入るとれ帝釋修羅の軍ひとあ  
 けううて目さす討つとられつ首をとるも  
 ありとさるもあり双方ひまありとい見えされ  
 ども松田太郎左衛門ハ明智日向守る軍手ぬる  
 しくやあて込で羽柴りめのどもと打ちくやこ

の山一川ころろと取ちる山崎の戦はうつとさめ  
 のとと嚴重く下知せし言葉よとちその身ハ中軍  
 にあうて多くの兵士を指揮し軍の塩合をさうり  
 進退の機会を見つり居たれども日州のどどの  
 ことを辨知ぬ太郎左衛門とありこれゆや進も退も  
 その時宜あるのをゆされどもこの山一川をさ  
 るど心よめけく軍ひあをいぐ取て見を申す  
 と眼の前よ打たをさる味方の勢を見むさもせ  
 ば漂ふあしを直しめくまくと采配を打あり  
 打あり二度死をたあり不思議の軍をささ  
 びして人よこぎて手柄ハ顯しめく唯一日の



命をこそ永き子孫の顔をあとせと真先よこそん  
 ておののる相従ふりのどもい大将うさせ何  
 面目を人ふ合をべきあくるふあけよつげよ  
 をくめとさしめふけやう坂道とちとも擬議せ  
 べ切上り打のりう扱先よちう長蛇またうえい  
 聲をあけく攻たうう山の上も堀尾茂助堀  
 久太郎勢を左右へさうと引さげ落し矢雨あふ  
 と射うけうちあけなうつら松田とらと見ゆ  
 りあまこそ明智方の物頭松田太郎左衛門は鎧の  
 ろろ袖と草摺は赤と白一段やまをたおたり  
 彼とくやと下知しけしは両手の足輕心得ゆと

いあまうをく左右一途よらうそあそ  
 ちううか太郎左衛門心むりうの猛けきど誰う打  
 主も知ぬ玉よ綿嚙の間を打ぬうまう仰く  
 處を右の馳う胸板うけく射られいあどよその  
 倒れんと堀尾堀の兩人いこれとみせ  
 明智方の大将松田太郎左衛門を射とめいそ  
 駈下しと首をあけることよばりれバ羽柴方よ  
 氣力を増すの勝関をあげくけう明智方の侍い大  
 將うさせく氣をよめ進まんとうては色バ敵山上  
 屯しと弓鉄炮を列ねさうま退んと見うへれ  
 味方の軍勢をさすもたなく川がさたれば返を



この道もなりたぐ一所立をくく牙とて支えたり  
えたり跡は續き並河掃部溝尾勝兵衛あされ  
てと扣えたり堀尾と堀と兩人この塩合を見つ  
めり早切うきと落しけし松田が手の一の支も  
支えぬ人あぶきをとりて崩せしむどよ並河溝尾  
もゆりともふ牙とてちのぐり引りぞくこれ中  
川が伊勢與三郎と破り時刻とるあ時なり羽  
柴方よてい天王山を取隘めり筑前守のい  
と軍の圖ふあしと悦び勇ま百千の雷の只  
今あちりくる如き勢となりて駈立ると松田が郎  
等蟹江才藏たり一人取てり并河溝尾は是と

みて勝負の時の運よる汝が主の松田どの討  
あへども其手の侍多くあり待て必勝の軍となり  
汝が主の孝養よそなくよあめ如き亂軍ふゆけ合  
せ犬死して何の詮うあるといさむと聞ぬあり  
しと進みけり折しも筑前守の旗本あり福嶋市松  
正則とめめのため天王山へさし越せしよと  
や味方うちめちて山上より羽柴がこの旗せし  
とひるめり敵一人もたうけり正則無念の  
氣色ながうせんうこちのけしあさうとあがめ  
そくりさこのくちあしと見りさむむ只  
一騎山上さして攻めらるあまのゆるみと正則め

大朝臣二編卷九

二



けむりい今この山上へをのびる何ののそ名  
 乗名乗ともいふ色は彼武者あう仰さめその数  
 みゆるわのの名のるとも誰うの知をあふべと是は  
 松田太郎左衛門政近ふ二心あさめのとためすれ  
 蟹江才藏と申のなり主の使またちその跡  
 して主の討とあひしとや只今主の討とあふ  
 たりものあさう使の返事なすそのち誰殿よて  
 もあそしすを敵をいさうひ申やと云を聞うけ  
 正則う郎等桂市兵衛らうりうり汝は松田郎等  
 我の福嶋う家の子ちう相當の敵味方るれや組  
 んと聲うくまは才藏とこしもらうびまはをのれ

も武士のうちなるう主従一呀よれや捨頭  
 て得させんと荒言とる市兵衛らうりてをのれ  
 が勢のたうとて何条左様いあさある我の  
 五尺またうねども膽は汝一倍や大さく生を  
 一のちありといふうらやく組付てあむしめ  
 合しう市兵衛力つよけ色は終に才藏を取て押え  
 縄とけんとやうけるを才藏聲うけ生捕とい情  
 田が為み死して反逆與力の悪名となりさんうり  
 我は従て忠義をいげめとことされし詞よつけ  
 才藏も只黙然とて居たうけるを正則とのすう引

大隅言七終卷九

六



たてて我陣処へぞ連れて行

蟹江才藏正則が家人とちなる事

并中川兄弟高名の事

福鳴市松正則の筑前守の本陣へ馳帰り天王山を  
堀尾茂助堀久太郎取鎮めいと言上りけとバ筑  
前守大悦び其方とくと見届くやいふと問ふ  
ひうらさん日向守も天王山を以て大軍の切  
所と存いと見え松田太郎左衛門を進めて堀尾堀  
と切らびげんと謀り一処茂助久太郎よく働さ太  
郎左衛門を討捕ていへば早天王山の味方のめの  
となうていたゞ正則松田が侍は蟹江才藏と申

ののを召捕ていふが此の骨太く勢高く物の用よ  
立づく覺の御免を蒙り召仕いとてゆと存いゆと  
申けまバ筑前守立あがり堀尾茂助よく仕たり堀  
久太郎も手柄なりその山味方の陣所とたればん  
や山崎の軍いりちたるとお蔵とやらんがとへ正  
則が心次第と仰られしあう市松も物見よ出て  
能侍を得てけりと心中深く悦びをふちち主従  
の約とあしけけり筑前守の天王山と味方み切取  
とと聞ひひきううバ彌以て大軍なりとてとやう  
に加勢とさしむけ茂助久太郎よ一息つがせよや  
とて浅野が嫡子左京大夫み生駒雅樂助木村隼人



竹中久作等と旗本より引こけいとげくと下知  
あへびいづとも究竟の壮士なり我とらと馬  
むらふ

一説は浅野龙京大夫幸長へ天正四年江州坂本  
に生きたれば今年らうらふ七歳ありいづく戦  
場み臨むと堪べるといへり生駒雅樂助親正の  
甚助親重の長男今年ハ五十七歳あるといふ甚  
助といへり

是の山上の勢をまとい山下の氣を助けんが為  
て筑前守のい川も得たる処なり生駒木村の  
天王山へらせ付やりのあや横鎗より突くこと

ハ茂助久太郎のまといのひと得たとくハ席  
の山みづるめと龍の雲み騰るふ似たり明智方  
ハ大将討てて氣をとと士卒つうとて隊伍を  
とあの手のいさりて敗てけり山崎表うて  
高右近が手のの明智方と切けをてと  
敗軍をてく見へて処又丹羽五郎左衛門長秀明智  
方の齋藤ふを向ひ火花をちりして戦ひしと  
も齋藤父子の働さるるに抜群ある上味方の高山  
切崩されしを見て聊氣あくとけとけと一陣  
二陣いさうらびけらまよとれあやうく見えし処  
と長秀旗本を以て切めり命をのさうと戦ひけ







兵衛とあり手よめりて討てて我等ハ御邊を打て  
て兄が供養とそあへ可申と一禮とるこそそのまの物具  
のまことまをめとて突合しとも淵之助ハ立場より  
しつの上鎗ふちうたりけるより御牧が弟突まけ  
て終り首と淵之助ふととげり中川小七右衛門ハこれを  
見て兄弟ともいふ首得たるをやりて我等もその方  
にとらめやといふより伊勢與三郎ハ鎗とつ  
とい與三郎打りし推參至極のしめめめめ我を  
誰と見つるぞやもう退け田舎武士といふれ中川  
大いもう虜外なる反逆與力の義理しらぬ鎧の毛色  
のよろいびも定めて明智が手の大将あんとおの

ふの日向守ごの素性より武士といふれいんやを  
とて従ふこの方どもちう筋目たし侍りといふもわ  
るまがた無益の詞たうい詮もたういでく武士ハ肝  
らべめれと言とべいひたり汝う詞のありろけは名  
來て聞とてよく覺えて閻魔の廳のうらへせよ是ハ  
明智日向守より頼すれ伊勢與三郎貞興なりと  
いふ詞やめりとも素削素鎗の穂先のゆるづま互  
みさびく挑とあくと與三郎ハ年老より小七右衛門ハ  
壯年よりとあうも荒手なりし終り伊勢とつとあをて  
首と取瀬兵衛清秀これを見て小七右衛門ハ仕とる味  
方一番の勝利なりしも明智方の大将を討たれば諸軍







奥と見とめて引へるべしと懇よひあてあつていふべし  
 て駈けまゝの陣あり木村隼人組下を竹中半兵衛重治の従弟  
 松山主水と名乗て立むる方五郎の三尺七寸の刀を以てたる一雑  
 と雑ゆる松山の三尺七寸の大長刀の唯今人と雑居ると見  
 て又の徑血よとこしと打あつて水車よとこしとあつてあつる  
 方五郎もこれを見てあつて敵ゆめゆめと立ちあつて左右  
 らく打てとつるものゆめゆめ切て呉と詞をゆ  
 くれい主水ゆめゆめと打つて母衣とつるあつていふ長刀  
 ながさつてもあるとつるを捨首とつてとつて側走るとつる

重修真書太閤記七編卷之九終



